

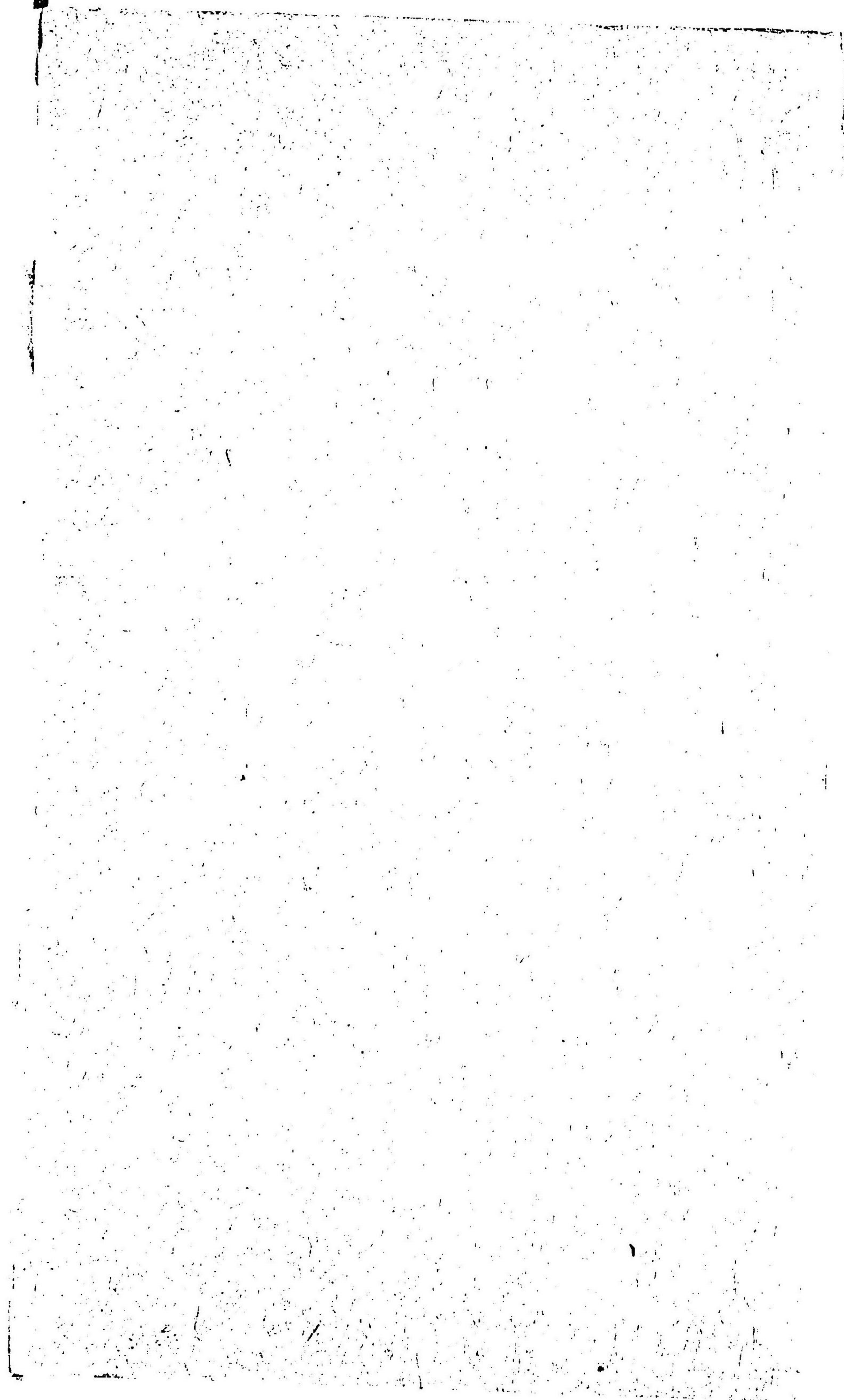
東京府青山
師範學校教諭松岡保著

定國讀本唱歌の研究

東京
廣文堂書店發行

4
319

牛



特23
846

東京府青山
師範學校
教諭
松岡保著

國定
讀本
唱歌の研究

東京
廣文堂書店發行

明治
43.9.15
内交

序言

一、本書は著者が今夏女子音楽傳習所の囑により、國定尋常小學讀本唱歌の講習を行ひしものの草稿に、多少の修正を加へたるものにて、主として小學校教員諸君の研究の資料に供せんが爲め、書肆の請に任せて公にせり。素より十日間の短時日に於ける講習なれば、意の悉くさざる所多し、幸に諸賢の批正を得て、斯道の一助ともならば、著者の本懐これに過ぎず。

一、又本書は、國定唱歌集の全般に對する、著者の研究批評と見て可なり、唱歌集の國定といふことは、困難なるものにて、可否共に大に論難あり。故に先進文明諸國未だ嘗て着手した

るを聞かず、實に我國今回の舉を以て嚆矢とす、故に之に對して批評を行ふは、當然の責任なりとす、猶同好諸君の研究批評されんを望む。

明治四十三年八月

冷風軒の風鈴を煽りて豪雨
頻りに降る澁谷の假寓にて

著者誌

國定讀本唱歌の研究

東京府青山師範學校教諭 松岡保著

第一章 總說

世界に於ける國定唱歌集の、レコードをつくつた、此度の讀本唱歌は、種々の意味に於て、社會の多方面から、早く發表されることを望まれて居つた。それは當局に於て、唱歌集を編纂されたことは、數々あつたが、今回の様に、全く私人の作譜を以て、專賣的官營の手段を、こつたことはなかつた。即ち今迄の編纂は、只中等程度なり、小學程度なりの、教材を附與した迄で

成		一		覽	
日本の國	かぞへ歌	おなかの四季	家の紋	何事も精神	たけがり
2/4	4/4	4/8	2/4	2/4	4/4
ニ長	俗樂 旋法	へ長	ニ長	ト長	ト長
六度	五度	五度	四度	五度	六度
・ニ ・一 ・ニ	・ホ ・ロ ・ニ	・ニ ・一 ・ハ	・ニ ・一 ・ニ	・ホ ・一 ・ニ	・ホ ・一 ・ハ
附點八分、十六分、四分、 附點四分、十六分二個、八 分一個ノ配合、 四分、二分、二分休止、	八分、附點八分、十六分、 附點八分、十六分、八分、四分、附 點四分、十六分二個、八分一個ノ配 合、 附點八分、十六分、四分、 反復記號 四分、八分、附點八分、 十六分三連音、 四分、附點四分、二分、 連結記號結合記號	八分、四分、附點四分、 二分、延長記號 四分、附點四分、二分、 變體半音、轉調、 附點四分、八分、二分、 附點二分	附點四分、八分、四分、 附點二分、結合記號 附點四分、八分、二分、 四分、變體半音、延長記號、 附點四分	附點四分、八分、四分、 附點二分、結合記號 附點四分、八分、二分、 四分、變體半音、延長記號、 附點四分	附點四分、八分、四分、 附點二分、結合記號 附點四分、八分、二分、 四分、變體半音、延長記號、 附點四分

表			
同胞	に五	鎌倉	國産の歌
2/4	4/4	4/4	4/4
ハ長	ホ短	ト長	ホ長
五度	八度	六度	八度
・ホ ・一 ・ハ	ロ ・ロ ・ロ	・ホ ・一 ・ニ	・ホ ・一 ・ニ
附點八分、十六分、四分、 附點四分、四分、二分、 附點四分、四分、四分、 附點四分、四分、四分、 附點四分、四分、四分、 附點四分、四分、四分、	附點八分、十六分、四分、 附點四分、四分、四分、 附點四分、四分、四分、 附點四分、四分、四分、 附點四分、四分、四分、	附點八分、十六分、四分、 附點四分、四分、四分、 附點四分、四分、四分、 附點四分、四分、四分、 附點四分、四分、四分、	附點八分、十六分、四分、 附點四分、四分、四分、 附點四分、四分、四分、 附點四分、四分、四分、 附點四分、四分、四分、

先づ拍子上から見るに、一學年二學年は、主として二拍子を取り、三學年以上は、二拍子四拍子相半ばして居る有様で、三拍子も六拍子も、之に加へてない。然し注意すべきは、備考に記入されてある通り、二學年に於て十六分四個を以て、四分音符一個と配合し、又第五學年に於て三連音を交へ、變拍子を加へたることである。

旋法より見るに、主として長旋法であつて、短旋法は全歌曲二十七中、僅かに二曲あるのみ。夫れが第五學年六學年に表は

れて居る。俗樂旋法は三學年に偶然一つあり。短旋法は何故に五學年以上より加へたるか、猶第五學年には、長旋法より短旋法に轉調せる樂曲あり。共に注意すべきものである。音程より見れば、五度の多きは二學年迄にて、六度は三學年に多く、八度は流石六學年に多い、其他の學年は四度、五度、六度、八度、と交々使用されて居る。六度音程の二學年に使用され居るは注意すべき事項である。變体音程は五學年より使用されて居る。

更らに音域の點より見れば、一學年に於ては僅かに(ニ)―(ハ)迄、六音間に過ぎざりしものが、二學年に入ると、急に(ニ)―(ニ)或は(ニ)―(ハ)迄、八音乃至九音に擴げられ居るは、注意すべきことである。そして音域の最も廣く使はれ居る樂曲は、第五學年六學

年である。されど三學年の「春が來た」及「かぞへ歌」の音域は、注目に値する。

これによりて之を見るに、本書編纂上に於て、其音程、音域、拍子、旋法等に就きて、各學年に對する取捨及排列は、何等其の根本の上に於て、固きオーソリナーを發見しない。次章以下に於て更らに深く部分に立ち入りて、研究することに仕様。

第二章 一學年

第一學年の樂曲は、大體から云ふと、よく出來て居るので、音程も五度以内、音域は(ニ)―(ヘ)迄の六音間で、旋律も簡單で快活である。然しながら、慾をいふと、歌詞のこなし方に、今一層の注意を拂ふの、旋律に我邦在來の童謠の調を加味してほしかつた。ここにカラス等は、夫にはもつて來いの、誂の歌でなかつたかしら。原來此學年兒童の音域は(ニ)―(ロ)又は變ロ、迄が適當なるものである。然るにここには僅か六音間しか使用されて居ない。入學當初ならともかく、學年最終迄も、此の狭い範圍にこめて置くことはよくない。よく其等の教材が、取扱はれる時期を、略想定して作曲せねばならない。左様に

注意すれば、決して二學年に至りて、急に廣められる様な、不自然はなくなる。

讀本卷一には、韻文が二つある。夫れは第三十八の桃太郎、次のカラスである。前の桃太郎は、幼年唱歌に出て居るので、よい曲節がついて居るから、これには新らしく、作譜する必要がない。ソユデこのカラスに許り、作曲することに、成つたのであらう。故に桃太郎のは、幼年唱歌の曲節を取つて教授するがよい。

第一 カラス (卷一、最終)

要旨、兒童の平常朝夕に目撃して居る所の、觀念中の題目で、之を唱歌して、其快感を與ふるのが、本課の要旨である。

歌詞、この歌は、信州地方の子守唄から脱化して來たので、舊讀本の改作である。歌としては此の方がよい。歌意は明瞭である。

曲節、先づ平易快活の曲である。(～)調長旋法の二拍子である故、第一拍を強く歌ふがよい。○第一段及第二段は中等の強さに、そして第一段第一節は $\frac{15}{16}$ の様に、わざとアクセントをつけて、歌ふがよい、○第四段もその様に、○第三段は軽く奇麗に、聲を使はすがよい、即ち、オミヤノモリへ、オテラノヤネへの所である。●音程は四度迄で、重に三度二度が、使用されて居る。○各段の終りの音は四分音符で、四分の休止があるから、附點四分の長さに、歌はない様に注意してほしい。●音域は(ニ)―(ハ)迄六音間である。○附點八分音符、八分音符、四分音符、十六分音符との配合で、主として八分音符が、使用せられて居る。○卷一、卷二のものは皆以上の條件の下に作曲されて居るらしい。

豫備練習 この歌曲を授くるには、左の音程を(ア)音若くは(ラ)音にて練習せしめてからやるとよい。

調 四拍子

1-3-15-015-6-15-015-3-1-01
1-1-1-1-

(注意) 此の曲の速さは、四分音符84であるが、これでは遅すぎる。88位に歌はす方がよい。

第二 ツ キ (卷二第五課)

要旨、これも前同様に、兒童の觀念界にあるものを題目として居る。兒童に適切な題目である。月に對する兒童の美感を、喚起するのが要旨である。

歌詞、別に解釋する程のものでない。○第一の歌は、十五夜に益大な月が、雲を抜いて表はれ出たことを詠み。○第二の歌は、忽ち墨の様な雲の中に呑れて仕舞つたことを詠み。○第三の歌は、再び光明の玉姿を、表はした

ることを詠んだものである。

曲節

全體の調子がつと兒童的にかつて欲しい。○一寸容易い様に出來て居るけれど、左様でもない、殊に $1\ 2\ 3\ 6\ 1\ 5\ 3\ 1$ の「ボン」は教授の際、注意をしてよく、其の高さを歌ふ様に、注意を要する。○第一の歌は中強に、

○第二の歌は弱聲に、○第三の歌は中強に歌はしめるがよい。○そして第二段は、ごく輕快の調子に歌はすがよい。●音程は五度音域は前者と同様である、○使用されたる音符も、四分音符が多く使はれて居る。

豫備練習

(ア)音或ハ(ラ)音にて行ふ

ノ調 四拍子

$1-2-13-0.3-6-15-0.15-6-15-3-12-3-11-0||$
 $7-7-7-7-$

第三 タコノウタ (卷二、第十三課)

要旨、兒童の實際生活、及び季節との聯絡より撰びたる題目

である。字風や繪風を、空高く飛ばす、愉快の様を歌ひて、兒童に快感を與ふるのである。

歌詞、七七の調である。○歌想語句共に明瞭である。

曲節

樂想スラリとして無理がない。○半音がこの曲から、使はれて居るから、注意して教授するがよい。○構成は四分音符、附點四分音符及八分音符との配合から出來て居る●音域音程從前のもと同じ。○第一段と第三段とは大體中強に、第二段と第四段とは、強聲に、そして孰の場合でも6の音は、美はしく歌はしめてほしい。○カゼヨク……とテンマデ……の所、は聲を弱く。○夫れから樂句の終の音は皆な四分音符で、四分の休止であるから、よくこれらの時間を注意する。○速度は四分音符(112)で可なり早い。

豫備練習、「ツキ」の豫備練習を復習してかかるがよい

第三章 二學年

この學年は、一年間の音樂的修養を経て居る。歌詞も餘程進んで來て居る。然し曲節はあまりに、前學年と隔りが過ぎはしないか、殊に「富士の山」に至りては、誠に程度のちがつた曲想で、無理な困難な音程が、澤山に用ゐられて居る。「母の心」とても同様で、これは拍子がむづかしい。實際家ちやなければ、此邊の手心はわからない。

前學年の音程は、五度であつたのに、「ふじの山」は六度音程が使はれて居る、三度四度の音程でも、中々困難なものがある。音域は前學年に(ニ)―(ハ)迄六音間の範圍に過ぎなかつた。夫れが今學年は一躍、九音間に擴げられた。拍子は大體違がつて居

ないが、四分音符一個に十六分音符四個との配合を授けねばならない様に成つた。是等はあまり前學年との聯絡とか、聲音系統の方面からいふと、ほめた事ではあるまいとおもふ。

第四 ころりま (卷三、第九課)

要旨、これは前課「うしろま」の連絡から、取られた題目である。乗馬は兒童の最も好む所、これによりて其愉快の情を與ふると同時に、動物愛護の感情を養ふことが目的である。

歌詞、文部省の懸賞應募の歌の一つで、八七四聯の抒情體をとつて居る、而して最後の一聯は、二章とも倒句法を用ゐて、興を添へて居る。○は、いはしいは馬を呼びかける詞。○ばかばかは馬の蹄の音。

曲節

快活な調子であるが、チト難かしい。●音域は(ニ)―(三)迄にひろめられて居る。●音程は今迄と變りはない。○八分音符を單位として居る。

○二拍子であるから第一拍は、少し強く歌はす。○第一段の 5 0 1 0 1 3 6 5 3 1 2 5 5 0 1 はハイシイのシイは弱聲に、アユの所は音が上り悪いから、そのつもりで教授する。○第三段 2 2 2 2 1 2 3 4 5 1 7 6 1 5 6 5 0 1 の所は弱くやさしく歌はせてススメバから段々少しづつ強くして又ススムは段々弱く歌はす。○そしてこの音程はチト難しから反覆練習するがよろしい。

豫備練習

音階圖によりて左記音程を指示しながら(ア)音若くは(ウ)音にて音程を練習する(ハ)調或は(ニ)調四拍子

1-2-13-4-15-6-15-1-1-7-16-5-13-6-1
5-1-1=

第五

かへるとくも (卷三、第十九課)

要旨、これも前課に關聯して、こつた教材である。小野道風ロバート、ブルース(すこつとらんご王)の事實により、歌つたもので、兒童に忍耐勤勉の性情を養成するのが目的である。

歌詞、これは合作であるとの事だ。○第一章は懸賞應募のもので(右原和三郎氏作)小野道風の事實を歌ひ。○第二章は(すこつとらんご王)ロバート、ブルースが、或時英吉利王の爲めに敗られて、林中の小屋に隠れ、再擧の勇氣もなく、がつかりとして、其の小屋に横仰して居ると、梁の上に一疋の小蜘蛛が、しきりと巢を張らうと、試みて居るが、度々失敗して居る、王は一心に之を見つめて、あはれなる蜘蛛よと思ふて居られると、蜘蛛は五度六度の失敗に懲りず、遂に立派な巢を張り上げた、其忍耐に感憤したる王は、大に元氣を奮ひ起して、再び兵を引卒して、英吉利王の軍を破りて、本國に追へ攘つたといふ事實がある。芳賀博士が之を基として、前歌に倣つて創作されたとのこと。

曲節

ト調二拍子で、快活平易であるが、休止符が一もないから、呼吸法に餘程注意してほしい。○實は第一段及第三段の終りの、四分音符は八分で澤山、ツシテ八分の休止を置くがよろしい。○猶第二段の二小節と四小節目の呼吸は上手にやらさないと、四分音符が八分位になつて仕舞から、ソノつもりで可成長く保たしむるがよい。○第一段の第一小節に結合記號がある。これは結合したる次の音符を歌ふことなく、其時間丈保持するものである。コノ場合には1の四分音符のつもりで、彈唱して宜しい但し第二の歌の時は、この結合記號をないものと見做して唱歌すべきである。○第一段第三段第四段とも二小節毎に呼吸するがよい左様すれば、充分次の呼吸の前の音を正しく唱はれる。○第一段弱聲、第二段中強、第三段強聲、第四段中強に歌はすがよい。○第二段のトビのビハ弱く軽く發音せしむるがよい。●音程四度音域(ニ)―(三)迄八音間。

豫備練習、前課と同様の方法にて行ふ(ハ)調或は(ト)調四拍子

1-76|5-12|3-21|5-015-32|3-21|2-5-11-0||

第六 ふじの山 (巻四、第五課)

要旨、季節に因み、且つは繪畫彫刻寫眞、或は實際に、兒童の見聞し居るもので、由來日本の國民性は、不知不知の裡に、云ふ可からざるインスピレーションを、この富士の靈姿より得て居るものである。これによりて兒童に、壯大優美なる感情を附與するのが、本課の目的である。

歌詞、第一の歌は富士山の獨り雲表に聳えて、足柄箱根の連峰を、膝下に朝せしめ、雷鳴は其の足下で聞く様な、有様の大きい山だ。誠に富士山は、日本一の高い山であるといふことを詠み、第二は、其高く聳えて立つて居る體は、始終千載不斷の雪を頂いて、其の裾の方は、常に霞に棚引かれて居る、美しい山はふじの山である。誠に富士は日本一の、美しい氣高い山であるといふことを、擬人格にして歌うたものである。

曲節

全體の調子は、此二學年の兒童に對し、高尙すぎて又困難である。少くとも尋常五學年以上の程度のものである。漸くにして之を教へ、まねし得たりとするも、この意味は不可解であるといはねばならぬ。○第一段二段及三段に、連合八分音符にて下がるものと上る所とある、随分とこれは困難である。或音の母韻を長く引きて、上下して歌ふと云ふことは、大人とてもむづかしいもの、ましてや尋常科の二學年の兒童に於いてをやだ。○殊に第二段の第一小節から第二小節に移る所などは、無理である。長六度より直ちに導音に上るなんて、この學年には不適當、其の續きも同様だか。○第三段の第二小節より第三小節に移る所は、まるで、上行の音階である。音階の練習は、普通第三學年から初める。然かも下行より初めるのが。歐洲各國でとる所の方法で、實際上行から初めることは、経験家の皆な困難と認むる所であるに拘らず。連合八分音符で、歌詞で上がつて行く工合、猶々困難と思ふ。○第四段は、 $1-64|3-365|432-1-1-0||$ は音の運動は簡單だが、むづかしい音程の連続である。○予が此夏講習

せし人は大概小學校の専科教員若くは、唱歌擔任の教師で、他の曲はよく歌うたが、流石の先生も餘程是には閉口して居つた。○まして此學年に教授するには、多大の注意をどの點に向つても、拂はなければならぬ。○發想はむづかしいから普通にやかましくいはぬがよい。●音程は六度。●音域は(三)―(三)迄八音間である。

豫備練習

前法により、丁寧に反覆練習すべし(三調或はハ)調四拍子

$5-65|3-53|1-67|1-0|1-64|3-65|4-32|1-0||$

第七

とけいのうた (卷四、第十五課)

要旨、時計の絶えまなく、運轉して能其責を盡すことを、詠みしものにて、兒童が仕事に對しては、勤勉なる性情を養成せんとするのが、本課の目的である。

歌詞

かつちんかつちんはセコンドの響で擬聲語である。

曲節 (ト)調二拍子で、全體の調子は快活である。○構成は今迄と殆んど同一である。これも休止符が一もない。マサカ時計に習ふて用ゐぬのでもあるまい。○例により呼息に注意するが肝要。○第一段と第四段はエタカトウの音符が四個宛ある。八分の休止位は得られるが、二段と三段とは夫れがなく、二小節毎に呼息することになつて居る。○各段とも中強に歌はせてよい。●音程四度●音域(ニ)―(ト)迄五音間。

豫備練習、別にいらぬ

第八 母の心 (卷四、第二十二課)

要旨 母の我身のつらさを忘れて、朝は早くから夜は遅くまで、子供等の爲めに、何やかさ心配して、骨折を惜まぬ親の心を詠みたるもので、兒童に其愛情の濃やかなるを知らせ、父母に心配をさせず、至誠を以て事ふべき心情を養ふ

が、この課の目的である。

歌詞 第一は太郎の事を籍り。○第二はおはるの事を籍り来て、母の愛情の至れるを詠みたり。○これによりて兒童をし、兩親にやさしく事ふべきことを教ふるのが、肝要である。

曲節 (ハ)調二拍子で軽快なる曲であるが、第一段及二段の二小節目の拍子をよく會得させねばならぬ。○全體は中強に、そして、呼息の所の四分音符が短かくならぬ様注意する ●音程は五度 ●音域は(ニ)―(ハ)迄九音間である。是迄のうちで廣いものである。○最後の終結より、最初に歸る音は八度である。即ちオクターブである。注意して歌はせねばならぬ。

豫備練習、これもいらぬ

第四章 三學年

此から第三學年のものとなる。此學年になると、音樂的鍛練も、餘程出來て居る。ソシテ鑒賞の度も高くなつて來るのみならず、凡ての智的方面の活動も、著しく發達して來る。故に餘程教材の選擇に、注意しなくてはならぬ時である。題目などに關しても、不都合なものがあれば、中々理屈をいふて、承知をせぬ時代に、この最初の「春が來た」の題目は考へものだ。説明に教師の注意を要する。又音程の方から見ると、此學年は六度音程が最も多く使用されて居る。學年の關係から見ると、別に不都合はないし、又使用されて居る音程も、左様困難といふ程でもない。曲想は學年に適合して居ない。「春が來た」日本の國な

こは、四學年教授の程度である。音域は(ホ)―(ハ)或は(ニ)である。高音の(ホ)はすこし高過ぎる、變(ホ)位を最高とせねばならぬ。

第九 春が來た (卷五第二課)

要旨、春陽來復して、枯れたる如き梢にも、若芽萌え出て四方八方が、皆青緑の草や木につままれて、やがて花咲き蝶舞ふの、樂しき季節になりたるを歌ひて、春の天地の、のどかに、樂しきことを兒童に、會得せしめ其美感を養ふにあり、

歌詞、 第一の歌は、春の光が到る所に、満ちたるを詠んだもので、春が來た、どこに來たのであらう、ソウソウ山には雪も消えて、青々として來たし、里にはチラ／＼梅も匂ひいで來たし、野にも若草が萌え出して來たといふ意。○第二の歌は春も段々と深くなつて來ると、花が咲くどこに咲いて居るだらう。ソウ／＼山には、梅も櫻も咲き居るわい。里にも桃や菜の花や

が咲いて居る。野にもたんぼほ莖草れんげ等が咲いて居るわいといふ意。○第三の歌は、山は緑に里にも野にも花が咲く様な、よい時候になると、小鳥迄も悦んで、山にも里にも野でも鳴いて、春を讚美して居るわいといふ意。

曲節

これは困難なる曲節まわしである。(ハ)調四拍子であるから、第一拍と第三拍とは少し強く歌はしめる。○第一段は大體中強に、第二段は大體弱聲に歌はしめ、間と答とに別けて歌ふがよい。そして第二段の終の二小節は、奇麗に弱く美しく。○夫れから第一段の第二小節の春か来た534511のiは注意して弱く、タといふ音が耳立たぬ様、○次ぎにドニのドに力を入れて歌はすがよい。下の段の第二小節の、里に來たのタも同様である。○實際いふと上の段のタはiが3に代り、下の段のiが5に代り、そして次の小節の5がiに代はれば、少しの無理もなく曲節も流暢になる。○夫れで是が出来上がったなら、組を二に分ち問答の形をとりて、歌はすと甚だ妙である。殊に男女合併の學級には、問を勇壯なる

男の子に歌はせ、答はやさしい女の子に歌はすとよい。●音程は六度迄、下の段の終の二小節は、注意して練習を反覆するがよい、●音域は(ホ)ー(ハ)迄十音である。

豫備練習

此の學年から數字譜を、板書して拍子を知らせ、ヒ、フ、ミ、の階名の呼法によりて、練習するがよい。(ハ)調若くは(ロ)調、四拍子

5-34|5-65|1-0|1-53|2-5-1-0||

第十 蟲のこゑ (卷五、第二十課)

要旨、季節より撰擇したるならむ、七草咲ける秋の廣野の月夜に、松蟲鈴蟲さては、くつは蟲なごが、聲をかぎりに節おもしろく、こりくりに鳴き渡る様の、おもしろさを歌ひて、快感を與ふるにあり。

歌詞

巖谷小波山人の作で、面白い子供らしい歌である。○ちんちろりんご

鳴くのが松蟲で。○りんりん鳴くのが鈴蟲。○きりり鳴くのがきりぎりす。蟋蟀キリギリスといふ説もあるが、中古の歌には其意味であるけれども、此の歌の意味ではぎりり〜と鳴く蟲である。○がちや〜鳴くのが蟬虫。すいつちよんど鳴くのが馬おひ或はた織蟲ともいふ。

曲節

歌詞をよく調和してない。○曲の構成は大部分が八分音符で四分音符は所々に少し使つてある。●音程は六度で音域は従前の通り。○第一段第二節の $1\ 5\ 3\ 0\ 1$ 曲節は第二の歌になると3が下がらないで5になるから正しく下がる様に注意を要す。○同様に第二段の三小節の所も。○夫から八分の音に二音或は三音を歌はしめる所は、拍子に注意して遅くならぬ様にするがよろしい。○第一段第二段迄は中強に。○そして次ぎは、鳴いて居るのを聴く心持で弱聲に。○チンチロ……リンは又同様に中弱に。○而して第二段のアン鈴蟲もは、又鈴蟲も鳴き出したと悦ぶ心持に中強に歌はせ。○鳴き出したから……リンリン迄弱聲に。○秋の夜長以下を中強に歌はせてほしい。左様したら幾分かは、曲節を

活かすことか出来様。○早さは80では少しおそい。○練習が出来たら88位が丁度よい。

豫備練習 (一)若くは(二)調四拍子

5-3615-3-1i-7615-i-16-5-11-011

第十一 日本の國 (巻六第一課)

要旨、我祖國の風光の明媚なるを歌誦し、愛國の精神と、忠君の志操とを奮起するのが目的である。前課の日本國に聯絡したる歌である。

歌詞、舊作を改作したるものである。第一の歌詞は我邦の松を以て。殊に

松島の風景の勝れたるを詠めり。○教授者は猶附帶して、松の霜雪に堪へて、四時變せざる其緑を賞し、兒童をして忍耐節操の尊ぶ可きことを懇話するがよい。○第二の歌詞は我邦の櫻花が、世界一の艶美なるを讃へ

ことに吉野山の櫻を以て、第一とすることを詠めり。○教授者は猶本居宣長翁の敷島の歌をひきて、其天真爛漫なる性情を説話し、かかる風光明媚なる國に、三千年來連綿たる、慈愛の皇室を載ける、幸福と光榮とを説き、益忠君愛國の精神を、鼓舞奨励の方法をとらる可し。

曲節

多くの種類の音符より、構成されて居て、餘り流暢ではない。○練習に多少の困難がある。全體この曲節は、四學年程度のものである。○各段を一呼吸に歌はす方がよろしい。○第三段は拍子に注意して、附點四分音符が短かくならぬ様16.71注意。○第五段はやさしく。○第七段の結尾の二小節も同様○十六分音符の連続して居る時の、歌へ方に注意。○音程は六度迄音域は(ニ)―(ニ)迄である。

豫備練習

別にいらぬ、

第十二

かぞへ歌

(卷六第二十五課)

これと取り立て、研究すべき價值はない。鞠つき歌や子守唄に用ゐしめるがよい。只注意するのは、此曲は頗る音域の廣いもので、此唱歌中我は海の子と、卒業の歌とを除いて、斯様に音域の廣く使はれた曲はない。然るにこれを第三學年に入れることは、ナト無理である。何ごか工夫がしてほしい。是迄の歌の中で一番高い音は(ホ)である、夫は春が來たの一曲で、低い音は多くは(ニ)である、これは(ロ)である、此歌は必ずしも歌はせる必要はない、歌はしたいなら排列に注意してもらひたい。或は我國の詩形を示したものが、唱歌として好まぬ形式である。

第五章 四學年

ゐなかの四季より、第四學年となる。試みに此學年と前學年とを比較して見様、前學年の曲節には六度音程のものが四曲の中三つまで、一つは五度、本學年には五曲の中六度音程迄使用せられて居るものがたつた一つ。他は五度音程のものか三つ、四度音程のもの一つ、却つて退歩した様な氣味合がする、然し音域は一音丈け高音が擴められて居る。前學年にはかぞへ歌と、春が來たの二曲が、この(ホ)迄使はれて居る。低い音は本學年は大低(ニ)であつて、これは前學年と大差はない。拍子も前學年は二拍子が二つ、四拍子が二つ。本學年は四拍子が二つ、其内一は八分の四拍子で、二拍子は三つある。

此學年の歌詞は、中々よいものがある。「田舎の四季」といひ、「たけがり」といひ、皆其尤なるものである。曲節も揃つて居るが、歌詞との調和の如何はしいものがある。「家の紋」唱歌としての價値は勿論ないものであるが、「たけがり」は夫れである。詳しいことは其章に於て。研究するに仕様。

第十三 ゐなかの四季 (卷七第三課)

要旨 春は麥畑菜の花畠。それを色ざる雲雀に胡蝶姉様かぶりの桑摘乙女袂も軽く。夏は菅笠涼しい聲で、歌ひながらに早稲植。秋は二百十日の疫日も無事に、五穀豊穰土産神祭。冬は松火かこんで一家團欒。いづれかこりくおもしろからざる。兒童に田園趣味を養成するが、

この課の主なる要旨である。

歌詞

この歌は懸賞應募のもので、中々よい歌である。體は七七調を撰んで居る。詩味、津々、よく田舎の生活を叙べて居る。○はるご、春蠶、すけがさ、菅にて編みたるかむり笠。○葉末、葉の末にて葉のうらを云ふ。○村の祭、鎮守祭のこと。○よもやま四方八方の轉にて種々雑多のこと。○てぎは、手際にて仕上の出来上りたる様、或は出来榮のこと。○年こし、年越にて節分の夜、即ち大晦日のこと。○大意第一は道の兩側には、青疊の様な麥畑に穂は秀で、居る。又黄金色の花も今を盛りと、咲き誇りて居る。それが見渡す限り一面であるうちに、雲雀は高く空中に嘯り、蝶は花を追ふて飛ぶ、まことに心地よい景色ぢや、この畫の様な中に、春風に軽く袂を吹かせて、桑摘む乙女が、あちらこちらに見えて居る。お蔭で春蠶も日増々に太つて來るといふ意。○第二は菅笠を頭に戴いて、涼しい聲で田植歌を唱歌しながら、早苗を植へて行くうちに、いつの間にか永い夏の日も暮れて來る。夫れにも拘らず猶少しと、植ゑて行くと、月が上りて田の水

にうつり、これが植ゑる度毎に、月の影がくだけて動く、何と心持よい有様ぢやないか、もう今日は此ぎりで仕舞にして、歸り路について、時々跡を見返へると、稻の葉の末に露がおちて、月の光がキラ／＼と輝いて居るといふ意。○第三は二百十日の疫日も無事に済むと、村の鎮守祭が賑やかに舉行される。その太鼓の音も、農民の悦びと共に、高く響き渡り、日和もよく續いて、稻も實のりよく、やがてとり入れて、日に乾かし臼で搗いて米にし、俵につめて、一家中のものが皆、今年も豊年ぢやと、大悦びて居るといふ意。○第四は松火に冬の夜寒を凌ぎながら、皆より集ひて、種々の話をしながら、母さんの手料理の大根なますを、御馳走になる、これが田舎の年越の肴である、一家楽しく食事を終り、猶も話をして居ると夜もいつしか更けて、棚にのせてある餅を、ひいて行く鼠の音まで、高く響く様に夜深になつた、モウ寝やうと、戸をあけて見ると、これはく庭さきに、雪が降り積りて居るわいと、いふ意味。

曲節

全體整へる曲なり、されど、何處かに、今少し落ちついた、緩やかな感じか

表はれてほしい、これでは田舎の農民の生活の感じが、表はれて居ない、小なる歌曲といふ勿れ、歌には田園の生活が、其調子の上によく表はれて見えるが、曲節は惜いことに其感じが、とはいひ此の集中の善い曲である。○音程は五度以内、音域は(ニ)―(ハ)迄六音間、拍子は4/8で四拍子の規則によつて歌ふがよい。○第一段三小節の6は軽く歌はせるがよい。○これ許りでなく、此曲節は頭音が多く使はれて、しかも弱聲部に表はれて居るから、猶其つもりで、注意しなければならぬ。○可成發想と發聲とに注意して、奇麗にうたはせてほしい。

豫備練習

別にいらぬ。

第十四 家の紋 (卷七、第十二課)

要旨

これといふ定まつた、やかましいものはない、家の紋づくしである。或は國民的教材として、取つたかも知れぬ。

がこれを歌ひて音調の快感の外に、何の得る所もない、内容に又何等の通じたる意味もない。畢竟作譜して之を歌はしめる程、教育的價値のないものだ。歌はせなくてもよいとおもふが、然し祖先崇拜は我國俗で、家の紋などいふことは我國ならぬ他國に、一もないものである、是意味にて授けたなら、少しは爲にもなるかもしれぬが、それは國語科の仕事ではあるまいか、唱歌としては他に適當の材料は澤山ある。

歌詞

芳賀博士の作と傳ふ。○いほりもかうは伊東の紋、○二つともゑは市岡、皆川、大石の紋、○三つともゑは西園寺、有馬、松平等の紋、○三つ星は毛利

○四つ目は鍋島、京極、佐々木、○九曜星は千葉、細川、○梅ばちは菅原、前田、○櫻は松平(上の山)、○橘は井伊、楠、○三がい松は大橋、○さゝの雪は松平(杵筑)

○上り藤は加藤、○下り藤は内藤、○たかの羽は阿部、○つるの丸は戸澤等である。

曲節

(三)調二拍子の平易な軽い曲である、曲節と詞の調和はあまりとれて居ない。○二段のいふもの所は、歌ひにくく且つ音がちやんと上がらない所であるから注意、○第五段は曲中の難節なり、○附點に注意して反覆練習すべし、○二番以下の歌、一音符に二個の詞つきたるものは、よく吟味して授くるがよい、○四段迄を反覆して、五六段は最後に歌はすなり、||は反覆記號の一種類である。○十六分音符の連合して、八分音符と配合されたるものの歌方は、注意をしてよく其音が響く様に歌はせる。

豫備練習

(三)調若くは(二)調四拍子

1-3-15-1-15-6-15-4-13-2-1-0||

第十五 何事も精神 (卷七、第二十三課)

要旨、陽氣發處金石亦透、精神一到何事不成、何事も精神が

しつかりとなり居らざれば、事業の成就することなきを知らしめて、勤勉努力の性情を養ふのが目的である。

歌詞

のきよりおつる雨だれ云々、漢書の枚乗の傳に泰山之雷穿石といふことあり、○なご成らざらむ云々、陽氣發處金石亦透より出でたり、成るとは成就するをいふ、○塔、蟻の塔なり。○磐石とは動かざる事にいふ、荀子富國篇に國安于磐石と、○大意は軒より落ちて来る雨だれさへ、絶えず休まずに打つ時は、石の堅きものにも、穴を掘るものである。まして我等は、性ある人と生れきて、吾は是をやらんと、一旦決心した以上は、如何に仕事が困難であつたとて、又他人からこの方かよいから、是をやれなどと勧められても、動かす誘はれず、勵み進んで行つたならば、何の事でも成就のしない事はない、鐵石の様なものでも遂に徹すことが出来る云々。第二は小さい蟻でさへ努力すると、彼の大なる蟻の塔をも築きあげ、燕の様な小鳥

さへ、枯木一枝口に卸んで、千里の廣い海でさへ、渡るのである。まして、人生れ来て、一旦目的を定めてからは、傍目もせず、奮進したならば、何事も決して、成就しない事があらうか、磐石の様な重い物でも、遂には之を他所に、動かすことが出来る。人々よ、奮ひ奮ふて精神を確かりとして、おやりなさいといふ意。

曲節、

(ト)調二拍子の快活なる軍歌調である。○附點のある場所に注意し、且つ四分音符の短くならぬ様注意して歌はしめるがよい。○斯様な曲節は、歌詞を明瞭に且つ第一拍を少し強く、歌はしめるがよい○最終の小節に串の記號あり、これはアルセンニヨ(Alsengeno)と同義なる略記號で、記號から記號に迄反すとの義なり。故に常に二個を要するので、連續記號ともいふ○第三段の終に(ハ)の記號あり。フェルマタといふ(Fermata)の同義の略記號にて、終結といふ意味なり。

豫備練習、(ト)調、四拍子

5-1-13-5-16-5-14-3-12-5-16-5-11-3-1
5-1-1

第十六 たけがり (卷八第三課)

要旨、季節に因みたる題目である。秋の日の空好く霽れて、茸狩の上天氣、友を誘ひて、裏の松山の奥深く入りて茸がり、興深くして、自然と親しむ愉快は、ごんなであらう。誠に學生にごりて此上なき、日曜日の仕事ならずや、されば兒童をして、この好時期にあたりて、秋の郊外の勝を探り、或は登山して、その元氣を鼓勵せしめるのが、目的である。歌詞、心持のよい歌である、五七七七八四といふ形式を用ゐて居る、凡べて五章に別つてあるに、作曲者は何故あつて之を一つに纏めて仕舞つたか、水

師營の様に節も別つてないものに、二、三、云々と番號を附して作曲し、これは記誦に便にした、これは記誦に不便にしたといふこともなからう。鎌倉の様に短かいものもあるに、○よき日や、のやは感嘆詞、○いざは副詞にてサアといふ意味○いで、感嘆詞人をうながす時、又は相手に對して競ふ時などに用ふ、○たごり行く、不案内の細道を迷ひながらに行くこと○いさを、功蹟にて功名といふ意○第一章は秋の日の空が、名残なく打ちはれて、氣は澄み渡り、風は暖かに衣を吹いて、何といふ心持のよい日であるよ。今日などは誠に山遊するに、申分のない、御詠の日和であるわいといふ意味○第二章は斯様の好い天氣に、家に引込んで、書を讀んで居るよりは、ドーダ我友よ、是から手籠を持つて、裏の松林に茸とりに行かう、あの山深く入りて、茸を澤山取つて來様と、友を促して、誘ひ行くことを詠めり○第三は友たちと打ち連れ立ちて、不知案内の細道を、わけわけ行くこと、悦しいことぢや、早や茸の匂がブン／＼として、山風に香つて居るわいといふ意○第四サア茸の香がブン／＼して、居るから、此の近邊に必ず茸があら

う。ドコカコ、かぞ搜して居ると、うれしやこの松の根下に、大きなものが見つかつたと、高く呼ぶ聲がシンとした松山に響いて、山彦に反響して來るわいといふ意。○第五サア大部皆も取つた様だ、日も大部落ちて來たから、是から一つあの岩の陰に休んで、皆集まりて獲物調べをしやう、誰が一番澤山とつたか、茸狩のてがらを競争仕様となり。

曲節

(ト)調二拍子、主として八分音符より成る。○歌詞のワタリ、ヨキヒヤ、タヅネン、ミツケツ、カゾヘン、等はこれを曲節にする時、よく其の前後の調子の關係、詞のアクセントの關係を吟味して、かからざれば、唱歌する際に於て不都合を感じるものである。○ワタリもただ $\underline{16.5401}$ なら何でもないが、前の關係から唱歌して來ると、不愉快に感ずる。 $\underline{13.3211-54301}$ ○ヨキヒヤも第二段五六小節の様に使はれるとよいが、其一小節より二小節の如きは、工夫を要す○第四段の一小節より二小節にかけて、タヅネンも然り、呼ぶ聲といふ音調のものは差支ないが、尋ねんの如き音調には一工夫を要す、其他の例皆同じ○第一段は歌ひにくい。夫れは六度五度

師營の様に節も別つてないものに、二二三云々と番號を附して作曲し、これは記誦に便にした、これは記誦に不便にしたといふこともなからう。鎌倉の様に短かいものもあるに、○よき日や、のやは感嘆詞、○いざは副詞にてサアといふ意味○いで、感嘆詞人をうながす時又は相手に對して競ふ時などに用ふ、○たごり行く、不案内の細道を迷ひながらに行くこと○いさを功蹟にて功名といふ意○第一章は秋の日の空が、名残なく打ちはれて、氣は澄み渡り、風は暖かに衣を吹いて、何といふ心持のよい日であるよ。今日などは誠に山遊するに、申分のない、御誦の日和であるわいといふ意味○第二章は斯様の好い天氣に、家に引込んで、書を讀んで居るよりは、ドーダ我友よ、是から手籠を持つて、裏の松林に茸とりに行かう、あの山深く入りて、茸を澤山取つて來様と、友を促して、誘ひ行くことを詠めり○第三は友だちと打ち連れ立ちて、不知案内の細道を、わけわけ行くこと、悦しいことぢや、早や茸の匂がブン／＼として、山風に香つて居るわいといふ意○第四サア茸の香がブン／＼して、居るから、此の近邊に必ず茸があら

う。ドコかコ、かご搜して居ると、うれしやこの松の根下に、大きなものが見つかつたと、高く呼ぶ聲がシンとした松山に響いて、山彦に反響して來るわいといふ意。○第五サア大部皆も取つた様だ、日も大部落ちて來たから、是から一つあの岩の陰に休んで、皆集まりて獲物調べをしやう、誰が一番澤山とつたか、茸狩のてがらを競争仕様となり。

曲節

(ト)調二拍子、主として八分音符より成る。○歌詞のワタリ、ヨキヒヤ、タヅネン、ミツケツ、カゾヘン、等はこれを曲節にする時、よく其の前後の調子の關係、詞のアクセントの關係を吟味して、かからざれば、唱歌する際に於て不都合を感じるものである。○ワタリもただ $\underline{16.5401}$ なら何でもないが、前の關係から唱歌して來ると、不愉快に感ずる。 $\underline{13321-54301}$ ○ヨキヒヤも第二段五六小節の様に使はれるとよいが、其一小節より二小節の如きは、工夫を要す○第四段の一小節より二小節にかけて、タヅネンも然り、呼ぶ聲といふ、音調のものは差支ないが、尋ねんの如き音調には一工夫を要す、其他の例皆同じ○第一段は歌ひにくい。夫れは六度五度

か連続して用ゐられて居るからである。注意を要す。○第二段二小節も前述の通注意○三連音符 ♪♪♪ はこれを四分音符一個と同一時間内に奏唱するものである。拍子上からは變拍子といふ、此學年に初めて出て居る。然かも此の曲にはかり、二つ表はれて居る。これらは、四學年に出すのは少し早い。注意すべき所である。○第四段の二小節 ♪♪♪♪♪♪ もむづかしい、ネンは中々上がらない○呼吸は第一段は二小節目と、風暖にさてもよき日や迄、一呼吸にするがよい○これは二小節毎にあれども練習の出来上がった時は、四小節に呼吸するがよい。○第一段二段中強に、第三段弱聲に、いさうらやまには漸次強聲に。山深くより探ねん迄、強聲に歌ひて、始めの如く繰返し、いでやあのより中強に復し。茸狩のいさを競べんは、強聲に歌ひて終るがよい。

豫備練習、

變拍子によく注意して練習するがよろしい。

()調 四拍子

3-2115-3-16-555615-4311-7617-1-||
 一三三四 一三三四 一三三四

第十七 近江八景 (卷八、第十七課)

要旨、音に名高き近江八景を詠して、其勝れたる風景の美を賞すると共に、其地理的觀念を、養ふにあり。

歌詞、

七五調の叙景體にて、舊讀本の改作である。○八景を歌の順序に列記して見ると瀬田の夕照、粟津の晴嵐、石山の秋月、比良の暮雪、唐崎の夜雨、堅田の落雁、矢走の歸帆、三井の晚鐘等である。○第一の歌の大意は琵琶の形に似て居るからとて、其名を荷ふて居る湖の水は、曇らぬ鏡の様に奇麗に澄み渡つて居る、其の周圍に名高い近江の八景があるから、是から一見物を仕様との意。○第二は先づ瀬田の長橋を渡りて、美しい夕照を見ると金波銀波が浪に輝いて其の入日の美しいこと、粟津の晴嵐も流石によい松の色がてり映えて、空はすこしの霞もなくはれ渡りた春日和のよいこと。○第二の歌石山寺は秋の月を以て名高い所である。今迄所々に漂ふて居た村雲が、いつの間にか、かくれて仕舞つて、秋月のかけ、清く光を

放ちて四方の眺めが宜しい。あれあそこに白く見ゆのは何であらう、あれは春より先きに花の咲く、比良の高根の暮の雪であるわい。○第四は滋賀の唐崎は夜雨を以て有名である。ソコには一本の松で、枝が四方八方に擴がつた、老松がある。堅田の浮御堂の近傍に、冬寒になると、澤山の雁が落ちて来る様も、中々風情のある者であるわい。○第五矢走に歸る船が三つ四つ五つ並んで、白帆に風を孕せて矢の如く行くのを送くる風が、夕暮の寺の鐘の音を持つて来る、あれはどこの鐘であらうか、そう三井寺の鐘であるわい、されば三井寺もこの近所であるかの意。

曲節

(三)調四拍子にして、旋律は静かな、穏やかな調を帯びて居る。○五度以内の運動で、弱聲部より起つて居る。弱聲部から起つて居るものは、これが初めてである。○此曲には結合記號や、連合記號が多く使はれて居る。○第二以下の詞にありても、歌詞の工合で結合はどつたり、こしらひたりしなければならぬから、其つもりで樂器を伴奏して、行く方がよい。○發想によく注意して、第一拍と第三拍とに強聲部がある如く、歌はせないど

曲が死んで仕舞ふから、よくアクセントに注意して、歌はせるのだ。○此曲には長音符例へば、二分音符の如きものが澤山ある。夫等の歌ひ方は可成△かこれは次の音に續く場合、第一段第一小節より第二小節に移る場合の如き▽が(各段の終りの節の如きに歌はしめて、旋律を裝飾せねばならぬ。○又連合線は $\overset{4}{4} \overset{5}{3} \overset{3}{1}$ 或は $\overset{6}{4} \overset{4}{3} \overset{2}{1}$ の様に、母韻を引いて下がり、又上がる場合は、前にも云ふた通り、音律の高さに注意せねばならぬ。○此曲節は五學年程度のものである。

豫備練習 (二)調 四拍子

5-65|3-24|6-i-15-0|1-76|5-43|6-43|2-1-||

第六章 五學年

此學年の讀本には韻文が六つある。其うち作譜されたるもの三つ、せられざるもの三つ、素より「かぶりもの」「家」「松の下露」等の如きものは、作譜すべき性質のものに非らざれば、初より左様ある可き筈と思ふ。夫れで數の上から云ふと、讀本唱歌の中、歌曲が一番少ない。歌曲の成績から云ふても、前學年の程度よりは、歌ふ可らざる「舞へや歌へや」を除き概して低すぎる。前學年の歌曲には今學年に授けてもよきものが多い。なかの四季」といひ「近江八景」といひ皆然り。されど今學年より短音階を入れたるは著しき差異といはねばならぬ、勿論系統的に編纂さるゝものは、他日出版さるゝ事ならんも、此學年

迄短音階の歌曲を課せざるは、如何なる理由に基くか、其を聞きたいものである、そは扱措きて今作曲されたる三曲のうち「舞へや歌へや」は、ドノ點より研究するも、到底學年不相當たるを免かれない。

第十八 舞へや歌へや (第九、第四課)

第一、是を課す可き時は、五學年に入りてより、また日淺くある。第一學期の初に當りて、幾何程丈音樂的特別の修練が出來様。ソコに持て來て、八分音符單位の、然かも弱聲部より起りし、四拍子の斯様なる旋律を、如何で諒解すべき。コンナ物位歌はれなくつちやいかぬ。こ編纂委員の一人たる某氏は、いはれたりこのこと、暴なりといふ可し。西洋音樂は

マダ我邦に入りてより、僅かに三十年しか経ぬ、實際に小學教育に入れられてからは、マダ二十何年といふ短日月で、ソナ無理な注文は酷である。普通教育の仕事は、技能的教育ではないのだから、教育的見地から、立論せねばならぬ。最も第二學年に、ふじの山の曲の様に、主調音から起る六度の音は、歌ひ易いといはるゝ方々には、何をいふたごて、おわかりになるまいとおもふ。六度も使ひ方によるものを。

第二、は呼吸法にまた充分なる熟練いや練習を経て居らぬ此學年の兒童には、此曲節の呼吸が困難である。此曲節のいづこたりとも、呼吸の容易い所があるか
 ♪ 1 5 1 1 2 3 ♪ ♪
 ♪ 1 1 3 5 0 3 1 2 4 3 0 5 1 ♪ 或は ♪ 1 5 3 5 6 5 ♪ 1 5 1 1 3 2 3 1 2 3 1 0 1 ♪
 の様に、八分の休止が終れば、直ちに附點四分に八分、四分音

符、八分休止といふ有様に急がしい。

第三、發想を附して歌ふことができない。曲想はわからず、拍子は困難、呼吸もむづかしいと來ては、如何に大人ごても音樂的に歌ふことは出來ないのは、當前、自己の力に、不相當な重荷は、負へるものでない。以上述べた様な條件を備へるここの出來なければ、唱歌にはならないのは、作曲者一同の知れる所であらう。

第四、作曲上の誤謬である。作曲者は歌詞中の「舞へや舞へや花に草に、蝶の遊ぶ時は今なり」とあるを「舞へや舞へや」花に草に蝶の遊ぶ時は、今なり。と作譜せり、余は思ふ、作曲者は歌詞を、普通教育上かゝる様に、曲節の犠牲にしてよいか、さきにいつた委員の一人は、形式上ドウしてもかくせねばな

らぬと然らば問はん此歌は作曲上必ず四拍子を要求しな
ければならぬか二拍子は何故に不可か六拍子はいかに三
拍子はいかに若し四拍子にては必らず歌詞をきる可から
ざる所にて切らざるを得ぬとならばこれを他の拍子に試
みたりや如何に。ソコデ予は疑を抱く若し作曲者の様に
「舞へや舞へや花に草に蝶の遊ぶときは今なり」。とするな
れば原作歌者の舞へや舞へや花に草に。蝶の遊ぶ時は今
なり。と語法上解釋が違ふ。歌詞は花に草に舞へや舞へ
や。蝶の遊ぶ時は今なり。といふ可きを。態々前句に倒
句法を用ゐたるものなりこれを作譜者の通りに意をこれ
ば其解釋の全然曲解たるを知らむ花に草には直接蝶の遊
ぶにかゝるにあらず舞へや舞へやにかゝるものなるはい

はずして明である。以上大體説明した様に此は當局者の
失策で國定唱歌集の制定の前途に一の暗雲を持ち來たし
たものともいふべきである。日頃學校唱歌の不健全なる
曲節。不健全なる趣味を改良せん。傲語せし當局者が敢
て審重に審重を重ねて公にされた作物にかゝる物があつ
ては、ナト體面に關しないかしら。唱歌の國定といふもの
は、中々むづかしいものである。机の上で考いた事は、根據
がなくていかぬ。

今一は「舞へや歌へや」といふ標題は、非教育的ではないかし
ら、これは「蝶と鳥」とも改題する方がよいと思ふ。理由は
いはずして明かと思ふ。若し歌中の詞をこつてつけたな
ら、なぜ「舞へや歌へ」とでもつけなかつたかしら、何處にも歌

へやこいふのは見えないが、然しごちらにしても適當ではない。
予は最後にこれは教授しない方がよいことを勧告する。

第十九 三才女 (卷九、第二十六課)

要旨、女性之三秀才、即紀貫之の女、泉式部の女、小式部内侍及

伊勢大輔の逸事を詠んだもので、其文才を讃へて、其徳を慕はしめるのである。

歌詞、第一は貫之の女を詠みたるにて、鶯宿梅の故事である。事實は村上帝の御時、清涼殿の御前の梅枯れにしかば、近侍を諸方に遣はし、代りを求めさせられければ、近侍西の京にて、美しき匂高き紅梅を見出して、早速に堀りとりて参らんとするに、そなる乙女の、短冊にも書きて結びつけたる。扱陛下は之を御覽せられて、そは何ぞと怪しげにとりて見給へ

ば、勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はば如何答へむとあり、あはれと思召し給ひて、こは誰の仕業にやとさぐり給へば、紀貫之の娘なりけりと聞き召されて返させ給へりとなむ。○第二の歌の事實は小式部の母、和泉式部、夫保昌に従ひて丹後國に行つて居た。すると或時歌合の會があつて、小式部も其の一人である、常々小式部の歌は、母に力を添へて貰ふならんと思つて居た人も多くあつた。所で中納言定頼が局の所に來て、歌はいかに、まだ丹後から使がこないか、嘘ぞ心配で居るであらうと感れたので、小式部が直ちに袖ひきとめて「大江山いくのみちの遠ければまたふみも見す天の橋立」と詠んだといふ事實。ふみは文と踏とをかけた言葉である。○第三の歌は一條院の御時、奈良の八重櫻を献納された其折に、御前に大輔が待りて居た、すると上より、この花を題にてと仰せられたので「古の奈良のみやこの八重櫻今日こゝのへに匂ひぬるかな」とあるが事實也。

曲節

此旋律は二種の旋法より成つて居る。首段は(ト)調長旋法にて、中段は

(ト)調短旋法終段は又首と同じになつて居る。故に三段落に別ちてあるのである。主旋律は勿論ト調長旋法で、短旋法は附屬旋法と見てよい。そこで旋律に用ふる短音階は、旋律的短音階といつて、左の如く上行と下行とが違がつて居る。

上行	下行
♯5	♯5
♯4	♯4
3	3
2	2
1	1
7	7
6	6

旋律的短音階

こゝに用ゐられて居る旋律は、この短音階から構成されて居る。長音階から短音階に轉調する所に(3)がある。これは前にも一寸出で居る記號であるが、用法が違がつて居る。ここでは延長記號として使はれて居る。延長の割合は長い音符は短かめに、短い音符は長めに延ば

す様に歌ふので、ココデは一、二、三、四、四分符二つ丈延ばして、更に休止符を一つ休みて、次に移るが宜しい。そこで大抵は延長記號のある時は、前の二三小節目より、漸次緩徐に、唱奏することになつて居る。故に「枝に」から「ダン」へ緩つくりと、注意して歌ひ、勅なればからは初めの拍子と同一の早さにて、歌はしめるが宜しい。○♯の#記號は臨時記號として用ゐられて居て、5の半音高き音でツと讀むのである。○二段落より三段落に移つた時、初めて表はれる3の音は高い心持で歌はして丁度よい。夫れは二段に於てはその音は(ト)の音よりは音の隔りが半音であつたからである。音程は六度迄音域は(ホ)——(ハ)迄。○弱聲部から起つて居る。○發想に注意して歌はすがよい。

○此曲節を教授するには。普通長音階を練習したる後、左の短音階的音程を練習するがよろしい。○短音階を正式に教授することは困難であるから(ト)調四拍子。

6-7-11-2-13-013-4-13-17|6#56-||

(注意) 此曲は主として女兒に課するがよろしい。

第二十 水師營の會見 (卷十第十二課)

要旨

日露の戦役に於て、彼我の最も難戦苦闘を試みたるは旅順要塞の包圍戦である。敵は日清の役に當り、遼東半島の還附を我邦に迫り、直ちに清國と九十九年間の租借の約を結び、銳意巨萬の費を投じ、天然の險勝に加ふるに、人工の完備を盡して、以て金城鐵壁となし、難攻不落と世界は怖れたるにも拘らず、十年の恨骨髓に徹せる國民は、直ちに其外廓を陥れて、包圍戦歳ならざるに、敵は白旗を掲げて降を乞ふに至つた。此時の攻圍軍の司令官は、實に古武士の典型と稱せられて居る、乃木希典將軍である。

將軍は戦闘に於て、其二愛兒を國家の犠牲として仕まはれたが、少しも之を意とせられず、遂に之を陥れ、世界の平和に貢献せられた功蹟は、國民の共に與に、感銘して忘れざる所である。故に教授者は宜しく此點に於て、將軍の高潔なる至誠の人格を、敬慕する様に兒童に説話さるるが必要である。

歌詞

水師營會見の有様を、叙述したるもので、これと決つた中心點はないが、前にも述べた様に、將軍が二愛兒を失はれたる、この人生の苦痛を外に表はさざる、忠君の至情に於て、吾人は實に胸中に泣かざるを得ず、故に之を中心として説話するがよいと思ふ。

曲節

(ト) 調短音階、四拍子で前曲の中段と同じ旋法に従つて居る。委員の一人がこれは朗讀のつもりで作曲されてあるといはれた様に、平易流暢である。○ 只附點音符の連続してある小節は、注意して附點を長く保持す

る様にして、四拍子の強弱を守つて歌はしめるがよろひしい。○呼吸は練習が出来たら、一段毎にする方がよろしい。○第一段は中強に、第二段は漸次強聲にして、第三段の(ニ)變(ホ)の音は弱聲に、美しく發聲せしめ、第四段は弱聲にして、水師營の所は中強に、歌はしめるが宜しい。

豫備練習、

はいらないと思ふが(ト)調短音階 四拍子

3-6-17-i.2|3-0|4-3i|6-3-i.76-||

第七章 第六學年

第六學年に讀本唱歌の課する、歌曲の数は六つある、此讀本中韻文が一番に澤山ある學年である。「卒業」の歌及「鎌倉」は先づよい歌曲である。此で義務教育を終るものである、音程も八度迄のものが二つあり、變體音程は前學年より出で居るが、本學年から初めるのが適當である。又音域も五學年には低音が變(ロ)位迄、高音が變(ホ)迄であつたが、本學年には高低ともに擴けられてある。實際は此學年二學期あたりから、音域は男女によりて、多少の相違が出来てくる。夫れは變聲し初めて來るものが、男女とも起るからである。左様なると男子は低音域が擴められて(ト)音位迄は出るが之と反對に、高い方の音

域は狭められて来て變(ホ)若くは(ニ)位、女子は全く男子と反對の結果を表はして、高音部が擴張せられ(ハ)……(ト)位、低音部は(イ)位迄である。であるから此學年の男生徒には(ニ)以上の音は、可成弱聲に歌はしめる様に、取扱ふが宜しい。拍子上から見ると、前學年と同様で變化はないが、此學年には少くとも三拍子を入れる必要があつたと思ふ。簡易なものなら六拍子もよいに、なぜ是等の拍子をこらなかつかど訝かられる、此學年の歌詞に三拍子や六拍子にして差支ないものがあるではないか。

第二十一 我は海の子 (卷十一、第六課)

要旨、前課の瀬戸内海に關聯して、取つた題目である、日本は

海國であつて、是からますく海上の仕事が多くなる許りであるから、海事思想を養成するのが、甚だ必要である。この要求を満たさんとするのが、即ち本課の目的である。

歌詞、此の歌はナショナルリーダー三卷の *Morna by the Sea* から脱化して來たらしい。○第一第二の歌は其の生立を詠み第三の歌は海上生活の樂しみを叙べ第四の歌は其の生活、第五以下は自己の抱負を詠めり。○七五四聯の自叙體に出來て居る。○とまや苦で群いた家のこと。○いふの香、海邊の香のこと。○なぎさ、渚にて波うち際のこと。○いみじ、甚にてこゝでは此上なきといふ意。○百尋、一尋は六尺をいふ。○行手、行く方で行くさきのこと。○龍捲、局部の急激なる旋風が海上に起るときに生じ海水を柱の如く捲き上ぐるをいふ、原因は氣壓の變化より起るものである。

曲節

困難な曲節ではない。普通の四拍子で音程も四度迄である。○これ

も早い方だから一段を一呼吸に歌はしめるがよい。○大體中強にて第三段目の二小節迄は弱聲にて段々中強に歌はしめるがよい。
豫備練習、 いらぬ。

第二十二 出征兵士 (卷十一、第十四課)

要旨、 前課に聯絡して取材してある。兵士の門出を送る一家兄弟の心事を叙し、出征せんとする兵士をして、後顧の患なく、一意國事に盡す可きを歌ひ、兒童に愛國盡忠の性情を養ふが、本課の要旨である。

歌詞、 こは嘗て文部省發行の戦争唱歌第一編に載せられたるものにて、作歌者は佐々木信綱氏なり。○夫れには兵士の門出と題せり、改題してこゝに表はれ來た者である。○第一の歌は、出征する我が子に向うて、父の望を語り。第二の歌は同じく母が願を述べ。○第三には兄の出征を祝う

て、己のが志を云ひ。○第四は妹の決心を抒へ。○第五は出征する兄が、一家に對する訣別と決心を述べ。○第六は最後の訣別の有様を叙せり。○七七四聯の抒情詩と見てよい。但し起句は六七をこれり。○やよ、感嘆詞にて人を呼び掛くるに用ふ。○いとへ、厭いとへにて、いむこと、こゝでは大切にする。○をへしの別は、維々しの別なり。

曲節、 (ハ)調二拍子にして四分音符を單位にして構成されて居る。之を前の戦争唱歌のに比べると、この曲の方が難かしい。従つて兒童には前者を好むだろう。一寸曲想はこの方が大きい。○音程は六度音域は(ホ)――(ハ)迄十音間、變體音程が一つ使用されて居る所は、經過音と見るよりは(イ)調短音階に轉調したと見る方がよい。○二拍子で第一拍を強く歌はせ、休止符の外の呼吸の所は、皆二分音符である。よく注意して、其時間を保たしめるがよろしい。○結尾に近く延長記號あり、注意すべし。

豫備練習、 ハ調 二拍子

1. 2 | 3 4 | 5. 6 | 5 # 4 | 5 3 | 1 - | 5 6 7 | 2 3 | 1 - ||

(注意) 此曲は主として男生徒に課す可きものである。

第二十三 同胞こゝに五千萬 (卷十一、第廿八課)

要旨、我國情を歌へるものであつて、平時に於ける國民の抱負と決心とを感憤せしめるのが、此課の要旨である。

歌詞、みいづ。威稜也。○細^{スズキ}戈は千足の枕詞。○君子國、聖武帝の天平勝寶四年藤原清河遣唐使として玄宗皇帝に謁す、玄宗其の容止の整へるを見、日本を稱して禮義君子國といへるに基く。○天職、天の使命と同意。○のり給ひ、宜なり仰せ給ひと同じ。○第一の歌は領土の範圍を述べ、第二の歌は國體を述べ、第三の歌は國民性を、第四の歌は生業を、第五の歌は國運の進歩發展を、第六の歌は天の使命を、第七の歌は國民に下し給へる詔勅を詠めり。○歌の體は首句一聯は七五、中一聯は八五、終一聯は又七五を取りたる叙事詩なり。

曲節、(ハ)調二拍子の軍歌調なれば簡單なり。○附點のある所とない所とによく注意して、教ゆればよろしい。○音域は前と同じく(ホ)——(ハ)迄音程は五度、強弱は二拍子の規則に従ふ。

第二十四 鎌倉 (卷十二、第六課)

要旨、鎌倉は頼朝が治承四年に幕府をこゝに開いてより、元弘三年北條氏の滅亡に至る迄、凡五十年間の首府であつた。文藝美術の上に迄、一流派を開かせた、土地柄であるだけ、何となく懷古の情に富んで居るし、又事實も澤山あるので、想出多き土地である。歴史的事實を知らしむると同時に、是等に對する情操を喚起するのが要旨である。

歌詞、名將の劔投せし云々、元弘三年五月、新田義貞其一族を率ゐて、連戦賊を

敗つて、稻村が岬より鎌倉を攻めんとしたる時、潮多くして渡る可からず、義貞日を相して干潮に間なきを知り、爲めに祈りて寶刀を投じ、神威をかりて士卒の兵氣を鼓舞し、遂に海を渡りて、一舉北條氏を滅したといふ事實を云ふ。○露坐云々、屋根なく風雨に晒らされてある大佛を云ふ。○問はばや云々、公曉義時の言を信じ承久元年正月、實朝拜賀の禮を、鶴ヶ岡八幡宮に行ふ、飯途を要し、終に階下の大銀杏樹の陰より躍りかかりて父の仇を報す云々とあり。○しづのをたまき云々、義經の妾靜御前頼朝の命により、心ならず若宮堂に今様を舞ひり、其の時の歌、しづや賤しづのをたまき繰返し昔を今になすよしもかなと。○盡きせぬ云々、護良親王後醍醐帝第三の皇子、足利直義の爲めに、この土牢に投せられ給ひ、回天の業遂に空しく、北條時行兵を挙げ、鎌倉を攻むるに當りて、遂に淵邊義博の爲めに弑せられ給ひし事實。

曲節

(ホ)調短旋法四拍子にして、よく歌曲調和せり、全體感情を込めて歌ふべし。○第一拍第三拍は強聲に歌はしむべし。○音程八度音域(ロ)――變

(ロ)迄。○オクターブは美しく歌はしむべし。○第一段第二段共に中強第三段弱聲に起りて漸次中強に終るが宜しい

豫備練習

オクターブの練習をなす可し。(ア)音を以て左記の者を練習する、初めは譜の如く次ぎに高音より前と反對に行ふがよろしい。

(ハ)調四拍子

7-7-17-011-i-i-i-01#1-#1i-i-012-2i2-01
#2-#2-12-013-3-13-011

第二十五 國産の歌 (卷十二、第十三課)

要旨、我國産の主なるものを上げて、一層産業の發達を計り内は供給を豊かにし、外は輸出を盛んにして、我國富を増すことを詠み、兒童をして産業の貴ぶ可く、大切なることを知らしめて、實業の思想を涵養すると同時に、地理的知

識を與ふるのである。

歌詞

うまし國、うましは美の義にて、我邦をほめていふ。○きこり云々、樵夫が材木を切りに入らぬ山といふこと。○山をうがちて云々、山から掘り出した金属を精練して、又山の姿を鑄ものにして造るといひて、山から出た金属をもつて、種々なる彫刻物や、鑄物をこしらへるといふ意。○山野おほはぬ、覆はぬにて、生へて居ない所はなしの意。○瀬戸、愛知縣。○九谷、石川縣。○有田、佐賀縣。○清水、燒京都。○輪島、塗、石川縣。○高岡、富山縣。○會津、福島縣。○七寶、名古屋、東京、大坂。○花筵、岡山縣、廣島縣。○黒江、和歌山縣。○三池、福岡縣。○小坂、秋田縣。○生野、兵庫縣。○紡績、東京、大坂、四日市、岡山等

曲節

(ト)調長調二拍子にて軍歌調である。○附點ある音符とない音符とを明瞭に區別して歌ふがよい。○(ホ)や(ニ)の音か澤山使用されて居るから、發聲に注意するが肝要。○音程六度。○音域(ホ)——(ニ)迄九音間。

豫備練習

要しない。

第二十六 卒業 (卷十二、第廿八課)

要旨、 入學以來こゝに、六年の長い月日の間、風雨暑寒を物ともせず、つごめし甲斐だけありて、今日の今、義務教育を終る事になつた。惟へば是といふも、常平素色々教育に力を盡された、先生方の資と、父母の恵によるものなるを會得させ、感謝の情を養ふが、本課の目的である。

歌詞

うれしや、やは感嘆詞やなも同じ。○おきて、旋にてきまり、國家のきまり、即ち義務教育のことを云ふ。○七五調七聯の抒情歌をどれり。○第一の歌は卒業の悦を抒へたるもの、大意は、マアうれしいことである。我國民たるものは誰でも、皆やらねばならぬ、普通教育の六年の義務教育を今日終つて、誠にうれしい。野邊山邊も、緑滴たる青柳と、咲き匂ふ山櫻とをこきまかせて、春風に匂ふ錦を、織り出して居て、我等の卒業を祝して呉れ

る様だといふ意味。○第二の歌は、うれしいなマア、いろはのいの字は何方から書くか、何と讀むかも知らなかつた我身が、いつのまにこんな澤山いろ／＼の文字を覚えて、知識を積んだらう。又何處が西だか東だか知らなかつた我身が、世の人並にいつの間に、色々の道筋を分け得たらう。いつの間に人の義理人情を辨へたらうとの意。○第三の歌はまあなんと悦ばしい事であらう、六年の長い月日の間、手をとつて色々と先生が、教へ導き下さることがなかつたならば、如何して心に智識の花や道德の花が開いたらう。思ふさまことに先生の、あつのお情がうれしいことである。思へばまことに、先生の深いみ恵が有難い事である。よとの意。○第四の歌は、うれし何とうれしい事であらう。情深き先生から下し賜はれた、この智識と道德とを、楫とも棹ともして、世の中を渡りて行かう(義務教育のみにて他の生業につくもの)猶吾は一層高き學問を修めて、高等科を修業仕様或は中學程度を修めて見様。さらば長々と御世話になりました、先生におかれましても御身體健やかに、機嫌よくいらせ給ひ、日頃親

しく御交際下された、同窓諸君も、無事健かに勉強なし給へ、我が同級諸君も御無事にとの意なり。

曲節、

變(ホ)調四分の四拍子で、全體の調子はよく整ふて居るが、今少し卒業の悦ばしき活氣あり、希望に満ちたる氣は、ひがほしい。○呼息に注意して四分の休止を正確に保ちて一拍と三拍とに、アクセシオンをつけて歌はしむ可し。○*5 1 3*の如く連結されたる音は、正しく其調子を保つて歌はしめるが肝心。○詞は素より明瞭に、そして發想に最注意を要する。○音程八度迄。○音域は此唱歌集中海の子とかぞへ歌とは、最も音域の廣いものである、これも十一音間即變(ホ)——變(ハ)迄である。○轉調の多めに本位音があるが、さして困難ではない。

豫習練備、 變(ホ)調 四拍子

5|1-23|2-56|5-#45|6-55|1-1767|1-5|
3|243.2|4-0||

第二十七

アサガホ (秋季卷二)
(始業)

要旨、季節に因みて撰びたる題目なり。朝早く床を出で、庭に出ると朝顔が、赤、白、紫と色とりとくに、美はしく、咲き出でたる、實に兒童の感興を惹くは勿論である。之によりて兒童の美感を養成するのが目的である。

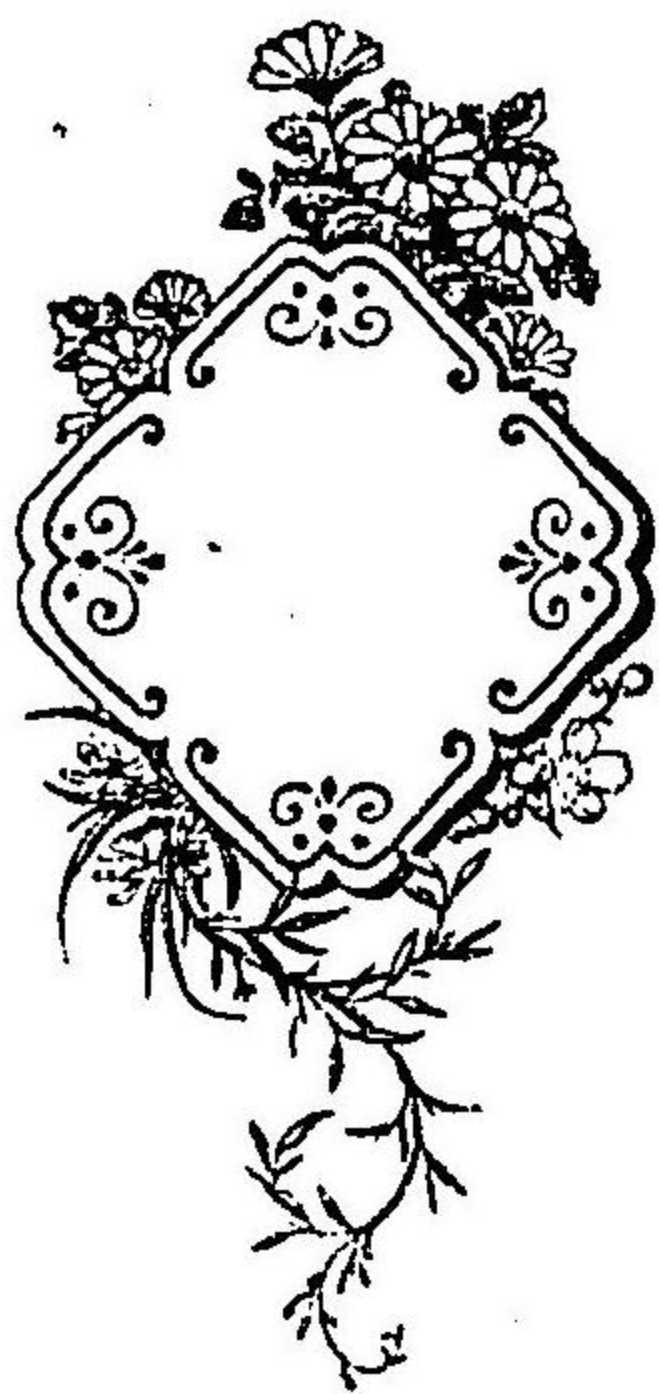
歌詞、をととひをとつひに同じ一昨日のこと。○體は八七にて末の一聯は七七にて變化をとれり。○全體の歌意明瞭。

曲節、先きに述べた尋常第一學年を参照するがよい。○大低同じ音程と音域とを持て居る。○殆んど八分音符許りで構成されて居る。○かゝる時、樂句の終りに四符音符が使はれて居ると、つひ短かく歌ひたがるから、注意するがよろしい。夫れに休止符の、少しもない曲節だから。○拍子は二拍子とあるが是は八分の四で差支ない曲節だ。

豫備練習、(ハ)調四拍子(ア)音若くは(ウ)音

1-3-15-015-6-15-015-3-12310||

國定讀本唱歌の研究 終



明治四十三年九月一日印刷
明治四十三年九月十日發行

讀本唱歌の研究

定價金四十錢

著者 松岡保

著者 松岡保

發行者 大倉廣三郎

東京市京橋區南橫町十八番地
東京市麴町區內幸町一丁目四番地

印刷所 三生舍

發行所

廣文堂書店

東京市京橋區南橫町十八番地

振替貯金口座
東京四六八四

東京府青山師範學校教諭
兼附屬小學校主事 島田民治先生著 第五版

新國定 國語科教授要義

總クローズ、綴
菊判全一冊
頗美 本
正價 壹圓五拾錢
送料 金拾貳錢

國語讀本は修正と云はんよりは寧ろ 改作と稱すべし分量及漢字數に激増をなし文形及趣味に 大改革を施したり本書は特に此點に注意し其要義を最も忠實に最も爽快に説明し之を取扱ふに最新思潮を汲める教授法を以てす

東京府青山師範學校教諭
兼附屬小學校主事 島田民治先生新著

新國定 算術科教授要義

總クローズ、綴
菊判全一冊
頗美 本
正價 金壹圓貳拾錢
送料 金拾貳錢

初等教育中、最も多くの劣等生を出すは算術なり。之れ教師が教材及び教法の研究不充分なるに起因するは論を俟たざるなり。本書は、先生が十數年間の經驗によりて、その缺陷を看破し、之が矯正の方法を最も適確に且つ親切に説明したるものなり。而かも、修正教科書編纂の趣旨を明かにして、教材取扱上及び教授方法上に、遺憾なからしめんことを期せられたり。

兒童教育研究會長 大川義行先生著 新刊

初學年を主とせし各科大教授法

クロース綴頗美本 菊判全一冊 正價金壹圓七拾錢 送料拾貳錢

小學校教授の中心は初學年に在て存す、初學年を中心とせざる教授は必ず失敗に歸すべし、而かも世に初學年を教授の基礎とせる教授法書の著述ありや否や、悲いかな我初等教育界に之なきなり、本書は大川義行先生が此の一大缺陷を補填せんとしてその深遠にして、宏博なる學識を以て泰西最近の教授法を汲み多年の實際經驗に基き初學年に基礎を立て以て、第一初學年兒童の心意研究第二初學年兒童の取扱法第三各科教授法（修身、國語、算術、地理、歴史、理科、圖畫、唱歌、遊戲、手工）に分ちその教授方法を理論に偏せず實際に流れすよく理論と實際とを調和せしめ形式的、内容的の長短を收拾し教授方法を完美せしめ初等教育に於ける一大原則を明かにし、教授力の徹底を期せる新教授法なり。敢て本書を實際教育家の座右に提供しその内容を實際に活用せられんことを希ふ。

賜天覽

兒童心理講話

高島平三郎先生著 高第十版

高島平三郎先生著 クロース綴頗美本 菊判全一冊 正價貳圓貳拾錢 送料拾貳錢

教育に關する諸問題は殆ど解決して餘す所無きが如し、然るに積年の一大缺陷として教育界の重要問題たるは兒童心身の發達に俱なへる教育法なき事なり。今や此の要求に充すべき高島先生の一大著書「兒童心理講話」は公にせらるる。本書は先生が二十有餘年間の實驗と深遠なる學識とに基き、加ふるに泰西最近の學說を斟酌して著されたるもの也。果せる哉發兌以來滿天下教育者に非常なる歡迎を受け既に一萬七千餘部は一般教育家及學校の手に歸せり。今や第十版は成る。教育者にして斯の名著を讀まざるものありや。學校に斯の名著を備へざる所ありや。朝日新聞曰く、其の研究は著者高島氏の外深く立入りて研究を積み人に向つて説く程の知識を有つて居る人はない此書は兒童研究を應用的に説明したる書でその宏博の識精微の見を以て左しも深奥なる近世科學を一般教育者及び家庭の父母に會得せらるべく平易にすら説明してある手竝は何人も企及なし能はざる所である教育家たる人に必讀の書として薦むるのみならず戸毎に一本を備へさしめたい。時事新報曰く、本書は家庭及學校に於て最も必要なる兒童を發達のに敘述せるもの也此書の如き心理書を用ひ始めて教育家及一般家庭に活きた心理を理會せしめ得べし又極めて通俗的にして時には駄洒落も成功せる著書にして家庭及學校には必備すべき書なり。

兒童教育研究會長

大川義行先生著

第七版

兒童個性の研究

クローヌ綴
菊判頗美本
壹圓貳拾錢
送料拾貳錢

初等教育は教科書も整ひ教育の術も進んで居るに關はらず一向に成績が上らぬのは兒童銘々の氣質、所謂十人十色の稟賦能力を利用して教育する事に關して一般教育者に實際の研究が出来て居らぬからである現代兒童教育社界に盛名噴々たる大川先生は此の大問題を解決せんとして非常に苦心せられ漸く公にせられたのが即ち本書である
本書は先生が二十有餘年間の實驗と泰西最近の學說とを基礎として心理學生理學教育學及び教授法の各方面より兒童個性に關する諸問題をとりへ之をその獨特の精緻なる筆と最も的確に豊富なる學識とを以て眞面目に論述せられたるものである。又文體簡明に文意の明晰なるが故に系統自ら立ち從つて内容も充實して居ることは現代教育界の一大異彩として誇るに足るものである。
世の實際的教育家は勿論兒童及教育家の徳性を論じ教育の缺陷を憂ふるもの、かつ家庭に於て兒童の特性を發見せんとするものは必讀すべき著書でありま

319

新基
定國
教定
科優
書良
編な
纂る
の授
趣要
旨訣

東京府青山師範學校教諭
兼附屬小學校主事

島田民治先生著(最新刊)

新國定
教科書
國語科教授要義

總クローヌ綴頗美本
定價金壹圓五拾錢
小包料金十二錢

新國定
教科書
算術科教授要義

總クローヌ綴頗美本
定價金壹圓貳拾錢
小包料金十二錢

東京府青山師範學校教諭
松岡保先生著

定國
讀本唱歌の研究

洋裝頗美本
定價金四拾錢
小包料金六錢

發行所
東京府
市金
橋區
南座
町四
十八
番八
地番
廣文堂

3

6

072654-000-8

特23-846

国定読本唱歌の研究

松岡 保/著

M43

CEH-0167

